

不登校を生まない取組と校内別室について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学2年生で、小学校の高学年から不登校状態にある。中学1年生の頃はほとんど登校できなかったが、校外学習には参加できた。現在も不登校の状況ではあるが、行事や定期テストに少しずつ参加できるようになってきている。また、教育支援センターや校内別室を利用し、自分のペースで学習を進めている。

具体的な取組

○会議資料と校内のデータ集約

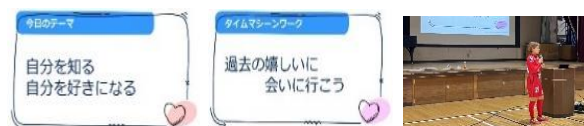
不登校対応委員会を月初めに実施し、生徒情報の共有を行っている。校内オリジナルの会議資料を基に、アセスメントや今後の方針を協議するとともに、数値による不登校状況の「見える化」を行い、全教職員が、校内の状況を把握できるようにしている。

○支援会議でのアセスメント

毎月第一金曜日の不登校対応委員会で不登校生徒へのアセスメントを実施している。各学年1人をピックアップし、支援方法などについて話し合う。その生徒のことを多角的・多面的に検討する。検討後、次なる手だてを考え、学年や担任に伝達し、日々の支援に生かしている。

○魅力ある学校づくり

外部講師を招へいし、「自分を好きになるガイダンス」で自己肯定感を高め、「職業講話」で社会と自分のかかわりについて考えた。また、教室環境のUD化を進め、前方に掲示物を貼らないなど、学習に取り組みやすい環境を整えた。



○校内別室の取組

週5日支援員を配置し、9時～15時までの間、校内別室に生徒が登校できるようにしている。午前は、個人学習で、午後はSSTを行っている。



成果

令和3年から令和6年まで 本校不登校状況調査において登校できるようになった生徒が、R3：2人、R4：4人、R5：5人、R6：5人と増加した。

また生徒のアセスメントにより、相談・指導を受けていない生徒が10人まで減少した。

課題

不登校の数が多く、原因や背景もそれぞれ異なり、対応に時間がかかる。保護者の意向で外部機関との連携が困難な場合がある。

校内別室の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、令和 5 年度は月 2 ～ 3 日の登校だったが、令和 6 年度から校内別室に登校を始め、今ではほとんど毎日登校している。行事や進路学習の際には学級での活動に参加した。現在は、目標の進路の実現に向けて、校内別室での活動を中心に学習に励んでいる。

具体的な取組

○支援体制について

校内別室は毎日開室し、学校支援指導員 1 人が常駐している。学校支援指導員は生徒の学習環境整備、学習支援、他の生徒や教員とのコミュニケーションをとる際の支援にあたっている。利用日の記録を作成し教員と共有することで、学級との連携が図れるようにしている。

○支援・指導内容の工夫

折り紙を折ることで、手先の巧緻性を高める取組を行った。作品を作り上げた達成感で自己肯定感も高められるようにした。また、校内別室を利用する他の生徒と、休み時間に会話をしたりゲームをしたりすることで、仲間との信頼関係を高め、自己表現する機会を設けている。



○校内別室の環境づくり ま

安心して過ごせる空間となるよう、入り口にはパーティションを置き、教室内は暖色で統一して明るい空間を演出している。

個別学習スペース、グループ活動スペースを設け、学習の形態によって使用する場所を選ぶようにしている。個別の学習スペースでは、タブレットを使って授業を視聴し、課題を行うこともできる。



○今後の支援体制

校内別室が不登校生徒の支援の大きな役割を担っており、担任をはじめ生活指導部会、特別支援教育部会等、関係部会との連携を図りながら支援を行っている。今後も支援体制を継続していく。

成果

今年度は教室復帰した生徒が 2 人、不登校状態から改善した生徒数は 4 人となった。校内別室が毎日開室し同じ学校支援指導員がいることで安心して学校に通うことができている。

課題

不登校加配教員の配置解消後を見据えて、校内別室を中心とした運営を行っているが、校内体制の確認が必要である。

不登校の未然防止の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、本人に係る要因で不登校となるケースが多い。具体的には、精神的不調や学業不振、友達とコミュニケーションがうまく取れないことなどがある。また、家庭環境が不安定になって欠席が増えるケースも多く見られるため、子ども総合センターや医療機関等の関係機関と連携して対応している。

具体的な取組

○生徒の登校状況の確認

週 1 回、各学年の担当から不登校の生徒や欠席増加傾向の生徒について情報共有を行い、対応を検討している。担任だけが対応するのではなく、S CやS S Wなどと連携して、当該生徒に合った支援や課題設定を協議している。

○夏季休業中の教育相談

2 学期が始まる前の学年登校時に、生徒は必ず校内の教員と面談をしている。ふだんあまり関わりのない先生と面談する生徒もいて緊張気味な雰囲気もあるが、これをきっかけに新しく関係性を築くことができる。



○生徒目線で考える授業

校内研究のテーマの一つに、「生徒が授業から離脱せずに学んでいるか見取る力を付ける」を設定している。授業中の生徒の状態を推察し、生徒全員が諦めずに学び続けられる授業について研究している。

○レジリエンス測定アンケート

学期に 1 回、生徒のレジリエンスの力を測定するアンケートを実施し、生徒の心の状態を把握している。生徒にもアンケート結果について解説して、自己理解を深めている。

成果

週 1 回の支援会議の内容や支援モデルを校内研修会で共有し、全教職員による校内の協力体制が構築できている。

生徒一人一人と向き合う時間を作り、長期休業明けの欠席者の急激な増加を防ぐことができている。

課題

生徒と教師間の関係づくりだけでなく、生徒同士のきずなづくりをさらに意識して取り組んでいく必要がある。

校内別室の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は現在、中学 1 年生であり、小学校低学年から不登校状態が継続している。要因は生活リズムの乱れや、学習の遅れがあることである。入学式以降、学校へ登校していない状況であった。現在は、校内別室に週 1 日登校できている。

具体的な取組

○校内別室についての案内

校内別室について、一日の過ごし方や入室手順をまとめたプリントを作成し、生徒と保護者が見通しをもって活動を開始できるようにした。

また、校外の適応指導教室やフリースクールとの比較を行い、自己に応じた学習形態を選択できるようにした。新しく着任した教員にも校内別室について説明を行い、校内で一貫した対応ができるよう働きかけた。

○支援会議

週 1 回の会議において、各学年や養護教諭、S C、特別支援教室専門員など様々な立場から生徒情報を共有し、多角的に生徒を理解するよう努めている。

現状の把握を行うだけでなく、必要に応じて手だての再検討を行っている。その際、別室登校の利用についても再考することで、無理のない範囲で登校を継続することにつながっている。

○校内別室の個別スペース

集団が苦手意識のある生徒に配慮し、パーティション等でスペースを区切って学習できるよう環境を整えている。



○校内別室における取組

校内別室では支援員と連携し、自主学習や体力づくり、当番活動を支援している。教室にプリントや給食を取りに行ったり、別室から行事を見学したりして、友人との関わりをもつことができるようにしている。

定期考査も別室受験ができることで、集団が苦手な生徒も参加できるようにしている。

成果

無理のない登校目標日数を設定することで、別室登校を始めた生徒たちは継続して登校することができている。また、校内体制を整えることで、担任が家庭に別室登校を勧めることや手続きを行うことへのハードルを下げることができた。

課題

3 年次に教室復帰を目指す生徒については、オンラインでの授業参加など、活動を工夫する必要がある。

本校の不登校対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、最初に保健室への来室が増え、話を聞く中で、家庭内の問題が明らかになった。保護者や家族に支援が必要な環境で育ち、家庭内の出来事が心身の不調に影響していた。特別な教育的ニーズがあり、特別支援教室での指導を開始し、校内別室も利用することになった。様々な場所で支援を受け、登校が少しずつ安定してきた。

具体的な取組

○不登校が生じにくい集団づくり

一年を通して構成的グループエンカウンターを実施している。4月には全校でエンカウンターを実施し、生徒会企画での活動も行っている。各教科では教え合い・学び合いを中心とする授業を行い、ふだんから仲間同士で協力し合うことのできる関係性の構築を推進している。

○アセスメントと支援会議の実施

担任や学年教員が気になると感じた生徒をピックアップし、支援会議を定期的に実施している。SCや養護教諭など関係教職員で現在の課題や背景要因についてアセスメントしている。早期に支援を開始することで、不登校の未然防止、長期化の防止に役立てている。

○別室による支援

面談で自分に合う目標を設定し、目的意識をもって校内別室利用を始める。校内別室では、学習のほか、ボードゲームなどの少人数での活動も行い、人と交流する楽しさを体験させる。できることを増やし、少しずつ自信を付けるようにしている。

○関係機関との連携

背景に家庭環境などの要因がある場合は、情報を集約し、SSWや子ども総合センター、医療機関などの関係機関に速やかにつないでいる。ケース会議などで支援方針を検討し、学校と関係機関で役割を分担して支援を開始する。学校での様子や変化も共有している。

成果

日頃の協働学習やエンカウンターを通して違いを認め合う温かい雰囲気やどの学級にも育まれた。そのため、教室復帰のハードルが下がり、不登校になっても復帰できる生徒が多い。



課題

背景要因が複雑で改善に時間を要することが多い。様々な事情を抱える生徒も増え、対応する教員を確保することが難しい場合がある。

校内別室の円滑な運営について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校時代に友人関係のトラブルにより不登校になった。保護者は中学校からの教室復帰を希望したが、他人の目を怖がり、教室に入ることができず、中学校の校内別室を利用することになった。中学校には安心して登校できる校内別室があるため、当該生徒は毎日学校に登校することができている。

具体的な取組

○別室対応による不登校生徒の支援

多数の不登校生徒の対応ができるように、校内別室を昨年度より広い教室に変更し、別室対応の運営ガイドラインを改訂した。また、別室対応の支援員と教職員の円滑な情報共有を図るために、支援日誌や別室の出席状況を全員で把握できるシステムを作った。

○個々の不登校生徒への支援

校内別室の利用生徒が増加したため、別室内でのルールづくりや、気持ちを落ち着かせるための個人スペースを用意した。また、支援員や学級担任と情報交換しながら、SCやSSWと連携をとり、利用生徒と保護者への支援を行った。



○魅力ある学校づくり

生徒の意識調査として、年3回のアンケートのほかに「総合質問紙調査」を2回実施し、校内研修会を行ってから、学級経営や不登校生徒の支援に活用した。

絆づくりとして、生徒会と児童会が連携して小中合同行事の企画運営を行った。



○不登校に係る指定項目数値の減少

不登校対応加配教員を中心に、毎月登校支援会議を開き、不登校生徒のアセスメントや学級内で欠席が増えている生徒の情報交換を行った。さらに、生活指導部会や職員会議で支援の方向性を共有することで、細やかな生徒支援ができ、前年度より不登校生徒数が減少した。

成果

前年度に続き、不登校生徒に対する組織的な取組の継続と外部機関との連携の強化、校内別室の環境を整備したことによる利用人数の増加の結果、今年度は不登校出現率が減少し、学校内外機関のどこにもつながっていない生徒が0人になった。

課題

校内別室の支援員が毎日勤務ではないため、支援員の確保と別室利用者の増加に伴うルールの整備が今後の課題である。